

高村光太郎選集 4

高村光太郎選集 4

春秋
社

高村光太郎選集 第4巻

一九六七年二月五日 第一刷発行

定価 一五〇〇円

©高村光太郎

著者
編者

吉本隆明

北川太一

発行者

鷺尾貢

印刷所

株式会社三陽社

東京都千代田区外神田二一八

発行所

春秋社

電話 二五五局一九六一―五

振替 東京二四八六一

落丁・乱丁本はお取替致します

(小林製本)

NDC 918

目次

書簡	中原綾子への書簡	三
詩	人生遠視	一五
	風にのる智恵子	一五
	千鳥と遊ぶ智恵子	一六
	値ひがたき智恵子	一八
	山麓の二人	一九
	或る日の記	二〇
	レモン哀歌	二一
	荒涼たる帰宅	二三
	亡き人に	二四
	梅酒	二五
短歌	昭和十三年（一九三八）ごろ	二七
随筆	智恵子の切抜絵	二八

隨筆	智恵子の半生		三
隨筆	九十九里浜の初夏		四
隨筆	某月某日 I (昭和一年四月)		四
隨筆	某月某日 II (昭和一年一月)		五
隨筆	某月某日 III (昭和一年四月)		五
隨筆	某月某日 IV (昭和一年九月)		五
隨筆	某月某日 V (昭和一年五月)		六
隨筆	コスモスの所持者宮沢賢治		六
隨筆	宮沢賢治に就いて		六
隨筆	与謝野先生を憶ふ		七
隨筆	八木重吉について		七
隨筆	夭折を惜しむ——中原中也のこと——		七
隨筆	芭蕉寸言		八
隨筆	新茶の幻想		八
隨筆	ヒウザン会とパンの会		八
隨筆	本面について		九

隨筆	搖籃の歌	九三
評論	一彫刻家の要求	九四
評論	画に於ける詩精神	一〇〇
評論	写生の二面	一〇五
詩	寸言	一一二
	ばけもの屋敷	一一二
	村山槐多	一一三
	鯉を彫る	一一五
	萩原守衛	一二六
	堅氷いたる	一二八
	よしきり鮫	一二九
	マント狒狒	一三〇
	象	一二二
	森のゴリラ	一三三
	潮を吹く鯨	一三四
	北冥の魚	一三五

未會有の時……………	一二七
吾が同胞……………	一二八
芋錢先生景慕の詩……………	一二九
つゆの夜ふけに……………	一三三
蟬を彫る……………	一三七
雷電の夜……………	一三八
歩くうた……………	一三九
世界は美し……………	一四一
青年……………	一四三
迎火……………	一四四
小刀の味……………	一四六
隨筆 九代目團十郎の首……………	一四八
隨筆 ころみの味……………	一五二
評論 美意識について……………	一五三
隨筆 蟻と遊ぶ……………	一五七
評論 比例均衡……………	一六一

隨筆	手	一六四
隨筆	身辺三題	一六六
	悠久山の一本樫	一六六
	ほくろ	一六八
	「こどもの報告」	一六九
評論	書について	一七一
隨筆	詩の勉強	一七五
隨筆	谷中の家	一八一
評論	彫刻性について	一八三
隨筆	手形	一八九
評論	仏画賛	一九〇
隨筆	しゃっくり病	一九四
評論	木彫地紋の意義	一九七
評論	ロダンの素描	二〇七
隨筆	鷗外先生の「花子」	二二二
隨筆	自作肖像漫談	二四四

隨筆	自分と詩との関係	三〇
隨筆	母のこと	三三
隨筆	三十年來の常用卓	三六
隨筆	雷きらひ	三八
隨筆	蟬の美と造型	三九
隨筆	間違のこと	四一
評論	永遠の感覚	四三
隨筆	姉のことなど	四五
隨筆	野菜の美	四七
評論	戦時、美を語る	五〇
評論	美の健康性	五二
評論	彫刻家の場合	五五
評論	奉祝展に因みて	五七
	美術行政について	五九
	油画の問題	六一
	彫刻寸言	六三

隨筆	芸術政策の中心	二八〇
評論	芸術と国民生活	二八二
評論	詩精神	二八八
評論	芸術による国威宣揚	二九〇
隨筆	中央協力会議の印象	二九四
評論	ミケランジェロの彫刻写真に題す	三〇〇
評論	彫刻に何を見る	三〇二
評論	美術館の事その他	三〇七
詩	秋風辞	三一二
	夢に神農となる	三二三
	老聃、道を行く	三二四
	天日の下に黄をさらさう	三二七
	地理の書	三二九
	群長訓練	三三三
	事変二周年	三三四
	君等に与ふ	三三五

銅像ミキイキツツに寄す	三七
へんな貧	三九
源始にあり	三二
ほくち文化	三三
最低にして最高の道	三四
無血開城（わが愛するフランスの為に）	三五
太子筆を執りたまふ	三七
強力の磊塊たれ	三九
事変はもう四年を越す	四〇
必死の時	四一
危急の日に	四四
解題 1 崩壊の様式について	四六
解題 2 第四巻収録作品について	四五
吉本隆明	
北川太一	

高村光太郎選集

第四卷（昭和八～一六年）

〔書簡〕

中原綾子への書簡

昭和九年二月二八日

中原綾子宛 封書

拜復 おてがミ及び二幸よりのお贈物忝くおうけとりいたしました、大変御無沙汰申上げ、且ついつぞやの原稿まで遅延を重ね居りまことに申わけございません、父の死とつづいてちゑ子の病状悪化とで殆ど寧日なく今年も既になくならうといたして居ります、ちゑ子の狂気は日増しにわろく、最近は転地先にも居られず、再び自宅に引きとりて看病と療治とに尽してゐますが連日連夜の狂暴状態に徹夜つづき、さすがの小生もいささか困却いたして居ります、何とか方法を講ずる外ないやうに存じます。一片づきつき、尚それでも御詩集にまだ間に合ふやうでしたら書きますが、只今はそんな事で頭がめちやくちやになつてゐて何を書くか知れません故あぶなくお送りできません、此点幾重にも御わび申上げます、此を書いてゐるうちにもちゑ子は治療の床の中で出たらめの嚙語(マア)を絶叫してゐる始末でございます、看護婦を一切寄せつけられぬ事とて一切小生が手当いたし居り殆ど寸暇もなき有様です、御無沙汰の失礼平におゆるし下さい、大いそぎで乱筆のまま一筆、

艸々

昭和一〇年一月八日

中原綾子宛 封書

おてがみは小生を力づけてくれます、一日に小生二三時間の睡眠でもう二週間ばかりやつてゐます、病人の狂躁状態は六七時間立てつづけに独語や放吟をやり、声かれ息つまる程度にまで及びます、拙宅のドアは皆釘づけにしました、往来へ飛び出して近隣に迷惑をかける事二度。器物の破壊、食事の拒絶、小生や医師への罵詈、薬は皆毒薬なりとてうけつけません、今僅かに諸岡存博士の発熱療法といふのにたよつてゐます、もう三回注射しました。注射すると熱が四十度近く出て、其で幾分でも恢復の途につくのだといふ事です、まだ効果は見えませんが四五回はやつてみるつもりです、女性の訪問は病人の神経に極めて悪いやうなのであなたのお話をきく事が出来ません、手がミでお教へ下さるわけにはゆきませんか。今大急ぎでこれだけ。乱筆御免下さい。一月八日夕 高村光太郎 中原綾子様へ病人は発作が起ると、まるで憑きものがしたやうな、又神がかり状態のやうになつて、病人自身でも自由にならない動作がはじまります、手が動く首がうごくといったやうな。〈病人の独語又は幻覚物との對話は大抵男性の言葉つきとなります、或時は田舎の人の言葉、或時は候文の口調、或時は英語、或時はメチャクチャ語、かかる時は小生を見て仇敵の如きふるまひをします〉

昭和一〇年一月一日

中原綾子宛 封書

〔便箋数枚欠〕この療法はまづリンゲル液をもに注射してから（此は体力の補充の意味、）更に臀部へ硫黄剤の発熱作用を持つ薬液を筋肉注射し、三十九度から四十度の熱を出させます。患者は随分苦し

いらしいのですが、又その為興奮を誘発して注射した夜から翌日あたりへかけてかなり看護に骨折れま
すけれど、発熱してくると酒にでも酔つたやうになり、それから眠ります、一日位ねむつてさめると幾
分以前よりも騒がぬやうになるやうに見うけます、ちゑ子も此の二三日は以前ほどの狂態をせぬやうに
なり、出たらめの独語や放吟はやりませんがあまり高声ではなくなりました。薬は一切のみませんが、食
事も少々づつするやうになり、又時々分別を見せる兆候が見えます。小生も一縷の望みを其にかけてゐ
ます。此の療法が不結果に終つたら、その時こそ刹堂へたのむ外ないと考へてゐます。若し此療法
が多少でもきいて病状の軟化が見られたら、目黒辺へ一軒家をかりてちゑ子と其の母親と其弟（求職中
の弟があります。）とを住ませ、小生は又一人で此のアトリエで専心仕事したいと考へてゐます。ちゑ
子が完全に恢復して歸つてくる日をたのしみながら。今年こそ十分に仕事しなければならぬ時期に來
てゐます。小生の数十年の彫刻の修業はやうやく此頃になつてものになりかけて來た事を感じますから。
書きたいものも山ほどあり、作りたいものも山ほどあり、頭の中も体の中もまるで破れさうに一ぱいに
なつてゐます。若し今度仕事出来るやうになつたら奔流の勢でやらうと意気込んでゐます、一切をかけ
てやらねばなりません、もう足かけ三年小生は制作慾を殺してゐます、昭和七年七月十五日にちゑ子
が突然アタリン自殺を企てた時以來のちゑ子の變調で小生の生活は急回轉して勉強の道が看護の道に變
りました、研いだ鑿や小刀は皆手許から匿してしまひました、小生は木彫が出来なくなりました。それ
で粘土で彫刻をやつてゐましたが、ちゑ子の次第に進んで來る病状を眼の前に見てゐてどうする事も出
來ず、自然の力に抗する力も無く今日に及びました。病勢の一進一退はありましたが其はまるで潮流の
やうに結局押し流れるまでは押し流す力でありました。医者は此の狂躁状態は多分恢復する前の兆候だ
らうと此頃言ひます。其の真ならん事を神かけて祈つてゐます。小生はちゑ子の一生を犠牲にしまし

た。どうかして今後ちゑ子を安泰にしてやりたいと念願します、あなたの御親切を実にありがたく思ひます。あなたの同情は私に絶大の力を添へてくれます。乱筆のままとりあへず御礼申し上げます、
 今午後十時、ちゑ子は静かに就寝しました。

昭和一〇年一月二二日

中原綾子宛 封書

中原綾子様 林檎たくさんいただきまことに忝く存じます、チエ子はおろし林檎を好んでたべますので毎日食後におろしてやります、いただいた林檎は新鮮なのでまことに結構です。昨夜ふと一聯の詩を書きました。あなたの詩集にいつ序が書けるかわかりませんので、ともかく此の短詩もお送りして置きます、序が間にあへばよし、間にあはなかつた時は此をおつかひ下さつても差支ございません、チエ子は今日は又荒れてゐます、アトリエのまん中に吃立（マツコ）して独語と放吟の法悦状態に没入してゐます、さういふ時は食物も何もまつたくうけつけません、私はただ静かに同席して書物などよんでゐます、仕事はまつたく出来ません、今祐天寺近傍に借家をさがしてもらつてゐます、御礼やら何やらいろいろ乱筆のまま

昭和一〇年二月八日

中原綾子宛 封書

中原綾子様 おてがミいただきながら毎日の事に追はれて御返事おくれました、おてがミにある人の事は小生知りませんでした、さういふ一種の力の存在は小生の信ずるところでありますし、経験もござ